

山久会の皆様は山の本をどの位読んでいますか。

山が好きになると山の本を読みたくなり、読むと刺激されて更に山が好きになります。

山の本と言っても、ガイドブック、ノウハウ物、紀行文・随筆・評論、小説、ノンフィクション、写真集・画集、漫画・劇画等といった多数のジャンルがあります。

ガイドブックと写真集・画集を除いた分野について私見を書いてみますので、参考にして下さい。

・ノウハウ物

山の入門書は多数あるが、全くの初心者は本でなく、山を知っている人から教えてもらった方が理解が早く間違いがないように思える。しかし、ある程度の山歩きの経験を積んだ人には入門書は復習のためによいと思う。

また、山のノウハウに関しては、山と溪谷社からクライミング、冬山、気象、地形等々の専門分野毎に出版されているが、かなりの山好きでないと読みこなせないだろう。このため、深くは書いていないが、岩崎元郎による「登山不適格者」の一読を私は勧める。

・紀行文・随筆・評論

これらは、明確に分類できないので、ひとまとめにする。

私は中学の国語の教科書に載っていた「大蔵高丸紀行」で初めて山について知ったが、24歳のときに買い揃えた「日本山岳名著全集 12巻」にこの文が載っていて、感銘を受けた記憶がある。ただし、全てにおいて時代が違うので、今となっては一種の古典に向かうつもりでないといつてゆけない。

以前は登山家と言われる人が多数いて、多くの紀行文を書いていた。しかし、最近は登山家という言葉は死語になっている様であり、山のプロであっても紀行文を書く人は少ない様である。比較的目に付くのは田部井淳子くらいか。

大分古くなったが、芳野満彦による「山靴の音」は未だ広く読まれているようだ。

中央線の車掌だった山村正光による「車窓の山旅 中央線から見える山」も特異な書である。

随筆・評論については、毎年多く出版されているが、百名山や自然破壊に対する批判が多い。10数年前の発行だが、本多勝一による「リーダーは何をしていたか」は示唆に富む書である。

溝手康史による「登山の法律学」は希有な書である。ヒマラヤ登山の経験のある弁護士が山での法的責任を論じている。「登山者が誘発して落石で怪我」、「鎖の不備による転落事故」、「ガイドブックの間違いによる事故」等々興味深いケースが列挙されている。

最近では、羽根田治による「山の遭難」がデータを基に遭難の原因から救助までを詳しく解説しており、遭難の実態を知ることができる。

・ノンフィクション

著名登山家・クライマーの人生や劇的な登攀に関する書は多く、山で亡くなった加藤文太郎、松濤明、森田勝、加藤保男、植村直己、長谷川恒男、小西政継等に関しては今でも多く読まれているようである。その中で、志なかばで逝った8人の登山家について記した

佐野稔による「残された山靴」は印象に残る書である。

遭難に関する書も多い。無名の人の遭難を対象にし、冬山での壮烈な遭難から一見馬鹿馬鹿しく見える道迷い遭難等多数載っている。また、長野、岐阜、群馬等の県警の山岳救助隊が遭難救助の体験を書いている。

奥多摩駅前の交番に勤務する金邦夫による「奥多摩登山考」や「山岳救助隊日誌」は、私が歩いたことのあるコースでの遭難事故が数多く載っていて、あり得ることだと実感した。

沢木耕太郎による「凍」は山野井夫妻による苛烈な山との戦いを描いたものである。

気楽に読むには、椎名誠がよい。ノンフィクションかフィクションかはっきりしない点が多いが、「怪しい探検隊」では笑ってしまう。

・小説

山岳小説を最も多く書いたのは、新田次郎だろう。

白馬岳山頂に展望用の大石を背負い上げた強力に関し直木賞になった「強力伝」、小学校の教師・生徒が木曾駒ヶ岳で遭難した実話に基づく「聖職の碑」、高倉健主演の映画にもなった「八甲田山死の彷徨」等は忘れられない。また、芳野満彦をモデルにした「栄光の岩壁」、今井通子をモデルにした「銀嶺の人」、加藤文太郎をモデルにした「孤高の人」は長編で読み応えがある。「剣岳〈点の記〉」は2009年に映画化され、美しい映像で評判になったが、原作は地味な内容である。

他には、夢枕獏による「神々の山嶺」という大作がある。これは、エヴェレスト南西壁を冬季・単独・無酸素で挑む謎の日本人クライマー（森田勝を連想させる）にマロリーのカメラの謎が絡りみ、一気に読破することになる。

また、「白きたおやかな峰 北杜夫著」、「氷壁 井上靖著」、「遭難 松本清張著」、「白き嶺の男 谷甲州著」、「高熱隧道 吉村昭著」は何度読んでも飽きない。「遭難」は地図によるトリックで、今ではこんなことはあり得ないと思っているが、読んだ当時は清張を凄いことを考えつく人だと思った。

最近では、笹本稜平による「還るべき場所」が秀逸である。これは永遠の課題である「何故山に登るか」を追求している。

少し柔らかくなるが、太田蘭三の山岳ミステリー集は知る人ぞ知るといった感じで、愛読している人が多い。この作家は自分が歩いたことのあるコースを題材にしているので、現実的な描写になっている。

森村誠一も山に関する多くのミステリーを書いていて、それなりに読める。しかし、他のミステリー作家による〇〇岳殺人事件といった数多くの小説は単に時間の浪費になるだけだと思う。

・漫画・劇画

山をテーマにした漫画・劇画は少ない。多分、若い人で山に興味を持つ人が少なく、且つ、山の描写は難しいからであろう。

それでも何人かの漫画家が描いているが、最も山の描写が上手な人は、谷口ジローであろう。「K」という文庫本を見れば分かるが、彼の絵には凄まじい高度感を感じる。また、

上述の「神々の山嶺」は谷口によって劇画化され、全5巻となって出版されており、一読の価値がある。

ここ数年では、石塚真一による「岳 1 3巻（20010/12 現在）」は山を知らない人にも読まれているようだ。遭難、搜索、救出又は遺体搬送と続くストーリーが多い短編集だが、バリエーションに富んでいて、主人公の山に対する愛着と優しさに心が揺さぶられる。